特254
186

La Bienheureuse Imelda

L'Ange de l'Eucharistie

聖體の天使
福者イメルダ

始

特254
186

La Bienheureuse Imelda

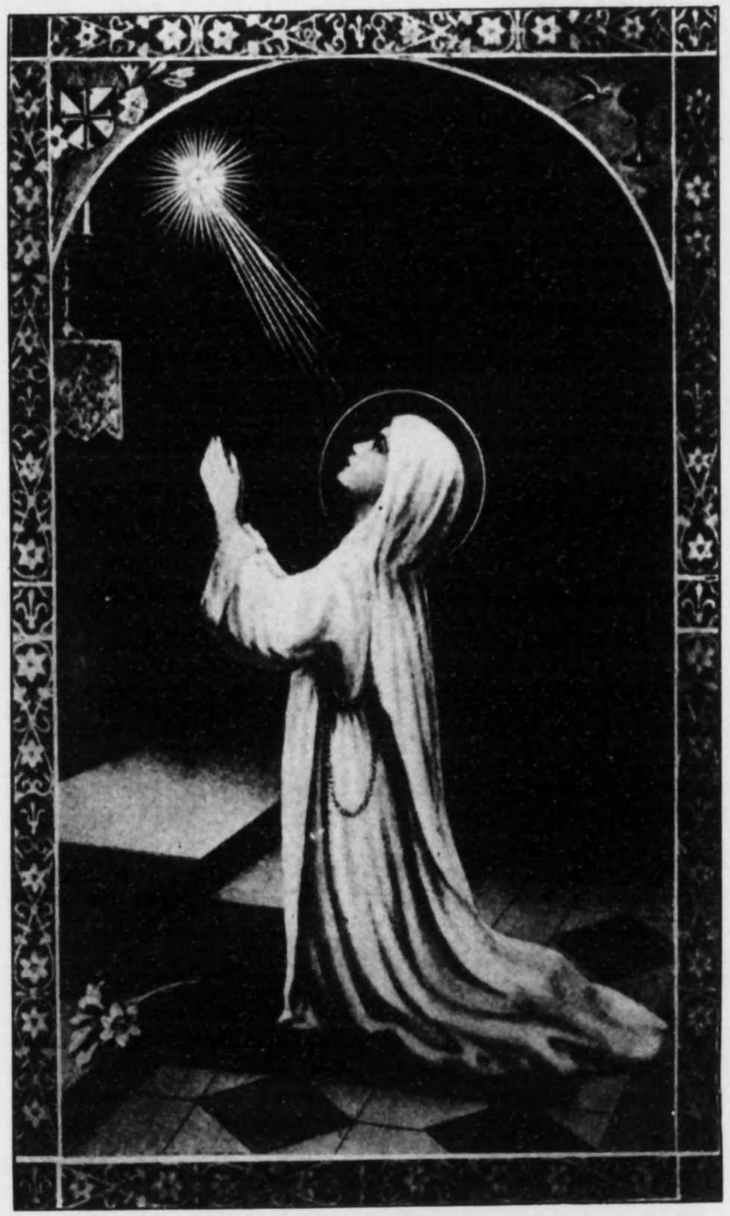
L'Ange de l'Eucharistie

聖體の天使
福者 イメルダ

昭和十一年 永納文庫

NIHIL OBSTAT:
Morioka, die 7a martii 1935,
I. Hayasaka.

IMPRIMATUR:
Sendai, die 25a martii 1935,
fr. Andreas Dumas, O.P.,
Adm. Apo.st



聖體の天使　福者イメルダ

聖体の天使

福者イメルダ

第一章　幼な子の友イエズス

子供達よ、イエズス様は皆さんを愛していらつしやいます。

イエズス様のお優しい御名を、廻らない舌でお呼びすることを、お母様は教へて下さいました。

イエズス様の御繪に、皆さんは小さい手を伸しました。

イエズス様に、お母様のお膝の上で、毎晩お祈りを致しました。寢床の側で、今も毎晩手を組合せ、枕許に懸つてゐる十字架の方を向いてお祈りをしてゐます。――ね、さうでせう？　忘れてはいけませんよ。

イエズス様は皆様のお友達です。

このお方を皆さんの神様として禮拜しなければなりません。

このお方を、皆さんの御主として認めなければなりません。

このお方に、天にいらつしやる皆さんのお父様として、お祈りしなければなりません。

イエズス様は、ほんとうに、皆さんのお友達におなりになりたくいらつしやるのです。

皆さんのお友達！　さうです。よく御存知でせう？イエズス様は、誰でも皆さんのお友達で、誰一人お取除けにはならないと云ふ事を。何と云ふ素晴らしい友情でせう！　その御寵愛を、その御聖寵を、その御親切を、誰にもお拒みになりません。救靈の希望を、永遠の幸福の希望を、誰からもお奪ひになりません。私共皆を、その聖い御血でお贖ひになつたのですもの。

その上、一日中額に汗を流して働いてゐる謙遜な人達に、貧しい人達に、憂ひ悲んでゐる人達に、それからさ迷つてゐる罪人達に、特別お目をおかけになります。

イエズス様の愛は、丁度、「子供一人々々が自分だけに注がれる愛に浴し、そして子供一同が、その愛の全部を受けてゐる。」と詩人が云つたあのお母様の愛に似て、凡ての人をお愛しになりますが、而しその中でも特に、皆さんの様な幼な子をお愛しになります。

子供達よ、皆さんはイエズス様のお愛しになる者、特別にお惠み下さる者、選まれた者、そしてこの地上に於けるイエズス様の天使です。

イエズス様は、あなた方を撫で可愛がり、ニツコリ微笑んで下さいます。

あなた方の方にお手をお伸べになつて、祝して下さいます。

あなた方に、天國の一番よい場所を下さいます。

これは私供大人に取つて何といふ羨しい事でせう。若し私共が皆さんの様な幼な子にならないならば――勿論背丈や年齢ではなく――幼な子の單純な心と、潔白な靈魂で。

子供達よ、あゝほんとうに若し皆さんが、イエズス様はどんなにあなた方を愛していらつしやるか、といふ事を知る事が出來たら！

福音書には、感心し切つて耳を傾けてゐる群衆に、御主がその生命の教理を、味ひのある譬話で説明していらつしやる、輝かしい幾頁かがあります。

次から次へと行はれた奇蹟に就て語る、驚歎すべき澤山の頁があります。イエズス様のお口を洩れる一つの言葉、一寸したその一つの身振で、盲目は見え、聾は聞え、跛は歩き、癩病は淨くなり、死人は蘇生りました。

而し福音書全體を通して、イエズス様の子供達に對する愛のことを書いてある頁よりも、もつと氣持よく、もつと人間味があり、もつと私共に親しみのある頁は、外にないと思ひます。

福音書の控へ目な書き振りから、私共は容易に次の樣な、美しい場面を想像する事が出來ます。

イエズス樣がお通りになるといふ事が、ユデアやガリレアの村に知れ渡ります。するとそれを聞くが早いか人々は、イエズス樣にお目にかゝり度い、そのお話を伺ひ度い、お觸りし度い、と先を爭ひます。イエズス樣は、そんなにいゝお方で、それ程巧みにお話しになるのです。子供達は、見張つてゐて、お弟子達に取圍まれながら、イエズス樣が近付いてお出でになるのが目に這入るや否や、小ちやな脚で勢一杯の速さで駈つて參ります。「それ！ ナザレトのイエズス樣だ。みんないらつしやい。早く〳〵。」とパパやママやお友達を呼び立て乍ら。見る〳〵中に、亞麻色や蒼色の小さい頭の一群が、押合ひ犇合ひ御主の周りに八方から詰掛け、その卒直な眼を眞丸く見張つて、お優しいガリレアの預言者を見上げます。この子供達の渦からは、押へ切れない喜びの叫びが、小止みもなく擧ります。子供達は、ボンボンだのお玩具だのはおねだり致しません。イエズス樣だけがお話しになる事の出來るそのお言葉、靈魂を動かすその祝福、心を喜びに滿たすその微笑の外には、何にも頂かうとは思つてゐません。併し乍ら、氣の弱い使徒達は、子供達が、その騷々しさと喧しさで、御主をお疲らせ申上げはしないかと、ハラ〳〵してゐます。熱心のあまり、子供達のうるささからイエズス樣をお庇ひしなければならないと思ひ、小言を云ひ〳〵子供達を逐拂ひま

す。併しイエズス樣は、そんなおつもりではありません。お弟子達を戒めて「幼な子達が、私の許に來るのを禁じてはいけません。天國は、この樣な人の爲めですから」と仰有います。

そして、子供達の輝いてゐる額の方へ、ニコ〳〵してゐる頭の方へ、イエズス樣は御身をお屈めになります。彼等の清く澄んだ眼を御覽になる爲めに、彼等にもつとお近寄りになる爲めに、イエズス樣は、御自身を小さく、すつかり小さくなさいます。子供達の髪の上にお手をお載せになつて、彼等を祝福し、愛撫し、微笑んでは又お祝し下さいます。

イエズス樣は村を通り、野をよぎり、岡を越えてお進みになります。かうしてお弟子達と一諸にお歩きになつてゐるイエズス樣は、長い間、小さい足音を後の方にお聞きになります。何處迄も何處迄もとお後を慕つてついて來る可愛いゝ足音を……。そして度々、道の曲り角で、おチビさんを抱いてゐるママ達とお會ひになります。それから小供、又子供……。その度にイエズス樣はお立止りになつて、微笑し、愛撫し、お祝しになります。何故なら、神樣の御國はこんな人達の爲めですから。

併し、子供達よ、皆さんはこんなに仰有るかも知れませんね。「えゝ、そりやあイエズス樣が昔パレスチナにお住みになつてゐた時は、少さい人達を大變お愛しになつたの。だけど、今はもう天

國にお歸りになつてしまつたんでせう。それでもやつぱり、その時分みたいに私達をお愛しになるかしら？」つて。

イエズス樣は決して皆さんをお愛しになる事をお止めにはなりません。幼な子は、いつ迄もその特別の御寵愛の的なのです。いつも、その聖心の一番上等な番所を、その美しい天國を、幼な子の爲めに取りのけてお置きになります。そして誰でも天國に這入る者には、幼な子の如くなると云ふ事を、その資格としてお求めになります。かうしてイエズス樣は、皆さんの樣になると云ふ事を、私共皆の義務になさいました。

びつくりなすつたでせう！　勿論イエズス樣が、皆さんの德だの欠點だのを、お見過りになつてゐるわけではありませんよ。皆さんを、小さい聖人だとは決して仰有つてゐませんし、又皆さんを、完全な人だともお考へになつてはゐません。イエズス樣は、皆さんのお父樣やお母樣よりももつと、よく、皆さんの中に折さへあれば成長して、皆さんを滅ぼさうとする、「惡」への傾きがあると云ふ事を、御存じです。皆さんの心の中に、丁度雜草や有毒な植物の樣に、皆さんの靈魂のお庭に侵入して、聖寵の善い種子の發育を妨げ、德の芽生を殺してしまふ、罪の芽生がある事を、御存じです。

併しそれと同時に、またイエズス樣は、皆さん位の年頃には、若しその心が未だ腐敗してゐなければ、傲慢だの野心だのには無關心だと云ふ事を御存じです。幼な子の心は單純で、眞摯で、隱し立てなく、何事も疑はず、委せ切つてしまひます。イエズス樣は幼な子のこの幸福な性質をお稱めになつて、私共に、若し天國に這入り度ければ、これに倣ふ樣にと、お勸めになるのです。

幼な子のこの天性は、その上、聖寵と愛德によつて豐かに實を結ぶ時、立派な德ともなる事が出來ます。子供達の中には、小さい時に、もう立派な德のお手本になつた人達がありました。こんな子供は何時の時代にも出ましたが、今でもやはりあります。皆さんの中に、ルルドで聖母マリア樣を目擊した、あの聖ベルナデッタ・スビルのお話を、未だ聞かない方がありますかしら？　皆さん疾くに御存じですね。それから幼きイエズスの聖テレジア、それからあの御聖體の小さい董のネリ、それからアン・ド・ギネ、ルイ・マノハ、ギイ・ド・フホンガラン、それからもつと〳〵澤山外にもあるイエズス樣のいゝ子であつた小さい人達の事、皆さんよく御存じでせう？　御聖體は子供達の靈魂を、イエズス樣に惹付ける爲めに、イエズス樣の愛によつて案出された、最も力强い手段です。丁度昔、ユデアやガリレアの道で、人々をお招きになつた樣に、イエズス樣は今、聖櫃の奥から、地上の天使を、その聖宴にお招きになります。誰でも、この大きな秘蹟に對する尊敬のあまり、

聖心の愛兒達を聖體拜領臺から遠ざけ樣とする人は、イエズス樣が曾つてそのお弟子達に仰有つたと同じお優しいお叱りを、受けなければならないでせう。「幼な子を我に來らせよ」と。

子供達よ、こゝにその証據がありますからお聞きなさい。それは福者イメルダ・ランベルチニの素晴しいお話です。

これは千一夜物語でもなければ、お伽噺でもありません。あの童話と云ふ樣な、子供の想像力に訴へる全く架空の物語でもありません。

これは實際にあつた眞實のお話です。その目擊者であるボロニアの修道院の記錄に長い間殘つてゐました。それから幾度か、私共が安心して賴る事の出來る書き物に記されました。

これは、その短い生涯が、御聖體の裡に在しますイエズス樣に對する、愛の燃ゆる吐息であつた小さい女の子のお話です。

子供の生涯ではありますが、而し、神樣がこの世の賢者智者の目からはお隱しになるその愛の秘密をお明かしになつた、子供の生涯です。

五月の朝の日影の樣に、はかなく終つた生涯ではありますが、而し、餘す所なくすつかり神樣のものになつた、充ち滿ちた、使ひ盡された、生涯です。

"子供等が我が許に來るのを妨げてはいけません　天國は彼等の如き者の爲でありますから"と仰せられてイエズス樣はいつも變りなく子供等を深く愛せられました

幼年時代の印象は一生涯の間いつも新しく生き生きとしてゐます　イメルダのお母さんはよくこれを知つてイメルダにいつも優しく天主様のことをお話し致しました

高い事柄を見拔く事の出來ない世間の眼には、平凡な何の色彩もない生涯ではありますが、而し、神樣の御許高く馳昇つた生涯、御自身へ向ふ靈魂の昇る度合で御覽になる神樣の御目には、美しい豐かに實つた生涯です。

第二章　家庭の愛

凡そ六百年程前の事でした。そんな遠い昔、ボロニアはもう、敎皇領の大きな美しい一つの都市として知られてゐました。

その頃、名ある貴族の中で、ランベルチニ家は、敎皇廳に市に對する忠誠で目立つてゐました。エガノ・ランベルチニは秀でた靈魂を持つた基督敎者騎士で、親切はその著しい特質でした。その上事務を處理する手腕がありましたので、次から次に、附近のカステロ市、リミニ市、オルヴィエト市の市長を勤めましたが、一方では又、ボロニア市の市會議員をも勤めてゐました。

エガノには似合ひの妻カストラ・ガルヂがありました。カストラはエガノ同樣、ボロニア一流の、そして其上最も信心深い家柄の出でした。ガルヂ家と云へば貴族の間で、その家柄の高さに於ても、信心の深さに於ても、ランベルチニ家に勝さらうとも劣りはしない名家でした。エガノとカストラ

は、世の中の何ものにも代へる事が出來ない程大切な一つの寶を持つてゐました。それは一人の小さい女の子でした。この子供の優美さ、信心深さ、可憐さは、兩親の心をすつかり奪つてしまつてゐました。この子供が何時生れたか、その確かな年月日は、はつきり分つてゐません。而し古い記錄に、その聖い死は、十二歳近くになつた一三三三年の事であつた、とありますから、多分一三二一年の六月か七月に生れたのだらうと思はれます。

この子供は、洗禮の時、イメルダと名付けられました。私共の間にはこんな名前の子供はありませんが、伊太利では極くありふれた名前です。そして私共にとつては、神聖な愛の詩を隱してゐる名です。

子供達よ、愛情深く信心深いお母樣のカストラが、神樣から托されたこの天使の教育についての苦心を、どんな風にお話したらいゝでせう。お母樣はイメルダを、神樣の御眼に、世の人の眼に、立派な子供にする爲め十分に心をくばり、何一つ忽せには致しませんでした。他のお母樣達同樣、先づ子供の身體の發育に心掛け、その健康狀態には、いつも目を離さず氣を付けてゐました。それから必要有益な一切の智識に就いて、子供の智慧が開ける樣にと氣を遣ひ、又お家のお仕事を習

はせたり、お裁縫の手ほどきを始めさせたりも致しました。

而し何よりも先づ第一に、神樣を知り、神樣を愛する爲めに創られたこの小さな靈魂を、神樣の方へ導かなければならないと云ふ事を、カストラはよく承知してゐました。それで凡ゆる機會に、イメルダの自愛心の極僅かな顯れでも制する樣にし、愛德と克己の纖細な感情を喚び起させる樣に、大變な熱心さで努めました。

それは大して難しい事ではありませんでした。一寸觸つてもその通りになる柔かい蠟の樣に、イメルダの靈魂には、お母樣の教へがそのまゝ、刻み付けられました。薔薇の蕾はかうして聖寵の生命へとほころび、お母樣の教への努力と、その裡にお働きになる神樣の御惠みとで、次第に大きく開いて參りました。

生れ付き優しく、愛情深く、それにおとなしくて素直なこの子供は、自分の義務としても、又神樣に對する愛からも、當然さうなければならないと云ふ事を、益々よく悟りました。

その信心は一つには、日々に增して行くイエズス樣に對する愛を汲み取る泉であり、一つには、その愛を絶えずイエズス樣にお目にかけるその年頃相應の方法でした。

その子供らしい信心に就いて、胸を打たれる樣な幾つかのお話が傳はつてゐます。お伽噺、物

語、傳說と云つた樣なものは小さい子供の喜ぶものですが、イメルダには何の興味も與へませんでした。それに反して若し誰かゞ、イメルダの居る所で、御親切な神樣の事を話したり、聖史の何かの逸話に就いて話したりする時は、この子供は直ぐに、その態度や、その注意や、その質問やで、自分がどんなにそのお話を尊んでゐるか、どんなに重んじてゐるかと云ふ事を示すのでした。

イメルダは、母屋から離れた靜かな一室を、自分だけの爲めの小さな祈禱所に當てゝゐました。そこに好きな御繪を順序よく飾り、日に幾度もお祈りをする爲めに參りました。かうしてイメルダは極小さい時から、神樣が後にお召しになつた觀想生活の序曲を奏で始めました。丁度、未來のレヴイ族が、その崇高な司祭職のお勤めのお稽古を始めるのを時々見かけますね、あんな風に。

イメルダは、お母樣こいつも御一諸に行つてゐた敎會の祭式から、詩篇や讃美歌の一・二節を憶へないで歸るやうな事はありませんでした。そしてその憶へて來た所を、自分の祈禱所で繰返すのが大好きで、他のお祈りを誦へるよりも好んでゐました。

イメルダには、その魂を奪ふ信心の對象がありました。お分りでせう？　御聖體の秘蹟の裡に在しますイエズス樣です。

イメルダは、聖櫃の中においでになる神樣に、烈しく吸ひ寄せられるのを感じました。イエズス樣は、たゞ私共に對する愛に負かされて、毎日、祭壇の上で御自身を犧牲に遊ばすのだと云ふ事を、聖體拜領で、御自身を私共にお與へになると云ふ事を、よく悟つてゐました。それでイメルダは、イエズス樣のこの愛に、お答へ申上げ度いと思ひました。而し聖體拜領臺に近付くには未だ小さ過ぎます。それで唯イエズス樣に、イエズス樣をお愛し申上げてゐる事、御聖體のイエズス樣を頂き度くてたまらない事を申上げるだけで、我慢しなければなりませんでした。そしてその愛は、絶えず新たになる望みで日に日に振ひ興され、消す事の出來ない火となつて、心の中で燃えてゐました。

何かこの子供に、この聖い秘蹟の裡に在しますイエズス樣に對するこれ程の信仰を、御聖體の神樣へのこれ程の敬虔、これ程の愛を吹き込んだのでせう。それは基督敎的の敎育と、お選みになつた靈魂の裡に於けるイエズス樣御自身のお働きとであります。

搖籃の中から、イメルダは、御聖體に對する信心の滿ち溢れる空氣の中に住んでゐました。その頃は、もう初代敎會時代の毎日の聖體拜領の習慣はなくなつてゐましたにしても、少くとも熱心な信者達は、機會ある毎に、毎日ミサ聖祭に與る事を逃しませんでした。それでお母樣のカス

トラは、小さいイメルダを連れて御ミサに與るのは、義務だと心得てゐました。

それはともかく、若し神樣が、その御聖體の百合の花をお植ゑになるにふさはしい土地と、その世話をするよく慣れた手をお選びになつたとしても、それに生命をお與へになるのは、神樣御自身、神樣御自身だけです。そして神樣が、神樣だけが、その花を成長させ、人々を德に導く爲めに、お咲かせになりました。

イメルダの靈魂には、信德が成長するにつれ、愛德も同じ程度に成長して參りました。御聖體の裡にイエズス樣がほんとうにおいでになる事を信ずる事が、熱くなればなる程、その女義も一層明かに心に浸み込み、そこに神樣の聖心が鼓動してゐるのが益々深く感じられて、愛の神樣と一致し度いとの望みは、愈々烈しくなりました。詩篇十八に「神の信仰は、幼き者に智慧を與へる」とあります。

イメルダの樣に、他の子供達も、神樣から、信仰と靈的の事に關する智慧を頂いてゐました。そして、ありとあらゆる快さを含んでゐる天の糧に飢ゑてゐました。

幼きイエズスの聖テレジアは、私共に大變近いその一例です。フランシス・ヂアムはこの聖女に就いてこんなに云つてゐます。「テレジアは七歳の時、もう既に、御聖體を頂き度いと云ふ燃え

る望み苦痛を感じる程の望みを持つてゐました。泉の水の樣に清らかなテレジアは、永遠の泉のお側に近く〳〵近寄つて、その心の燃える渴きを醫したいと考へました。その時代の淺い考へ方は、小さい子供の聖體拜領を妨げてゐました。テレジアは、聖體拜領臺に近付き度くて仕方がありませんので、お姉樣の一人にかう申しました。「お姉樣が聖體拜領にいらつしやる時、若し一諸に連れてつて下されば、私は外の人達の間にそつと紛れ込むんだけど。誰も氣が付かない程私は小ちやいんですもの」と。

アイルランドにフークといふ所があります。そこの小さい孤兒のネリが、御聖體を頂き度くて頂き度くてたまらなくなつたのは、たつた四歳の時でした。ネリはいつもこんなに云つてゐました。「私には神樣が必要の。あゝ、どんなに神樣に私の心にいらして頂き度いか。一體いつになつたら、いらつしやるのかしら？　こんなに待ちこがれてゐるのに。」と。

第三章　修道院の平和の裡に

リジュの巡禮者は、聖靈降臨の主日、晩課から歸つたテレジア・マルタンが、十五歳でカルメル會に這入り度いと云ふ望みをお父樣に初めて打明けたと云ふその場所を、ビソネのお庭で見る事

が出來ます。

かうした胸を打つ場面が、貴族騎士エガノ・ランベルチニの家庭にもいつかあつたに違ひありません。

イメルダは、丁度十歳にならうとしてゐました。

その晩、お父様のエガノは、御用でお留守でした。家の中は、しんみりしたお話をするのに都合よく、ひつそりしてゐました。お母様のカストラは、深い窓の狹間にでも娘と一諸に座つていらしたのでせう。イメルダは甘えゐ様にお母様の膝に寄り縋り、二つの接吻と接吻の間に、修道院に這入つて小さい修道女となり、イエズス様に一身を捧げたいと云ふ望みを話して、その靈魂を飾りなく打明けました。

初めてそれを打明けられたお母様のカストラは、平氣でゐる事が出來たでせうか。い、え、勿論平氣で居られる筈がありません。小さいイメルダをこれから先もう自分の側に一日中置いて置く事が出來ない、その小鳥の様なお喋舌りをこれから先もう家の中に聞く事が出來ない、と考へただけで胸が塞がつて、涙を止める事が出來ません。我慢出來ず、長い間泣いてゐました。

お父様は歸つていらして、泣き腫らした眼を御覽になりました。そしてイメルダの秘密を聞かさ

子供等は遊びの中に物事を考へることを覺えます……何度も御ミサに與る中に彼等はイエズス様が世を救ふためにカルワリオ山で御血を流されたのであるといつも考へるやうになります

母の心は子供の心の中を知りその秘密を聽くやうに作られて居ります……幼いイメルダは自ら進んでお母さんに心の中を打ち明けました

れ、その承諾を求められて、今度は自分が啜泣きで、胸が一杯になるのを感じる番になりました。

而し、エガノにしてもカストラにしても、びつくりしたわけではありませんでした。二人共、神の印の押されてゐるこの小さい靈魂の中に行はれる聖寵の働きを、毎日うつとりとして見てゐましたから。

それでエガノもカストラも、イメルダの望みに反對は致しませんでした。二人は神様の思召に逆ひ、神様の權利を横領する事を恐れたのです。

こは云ふものの、イメルダは未だ小さい子供です。僅か十歳で修道院に閉ぢ籠もつてしまふ！僅か十歳で目の粗い野暮な織物に身を包む！　僅か十歳でその頭を厚い被布で被ふ！　僅か十歳で粗末な食物に滿足しなければならない。

ほんとうに、こんな年齢でこの犧牲は普通の事ではありません。こは云へ、信仰の厚かつたこの時代には前例のない事ではなく、聖會法も別に反對は致しませんでした。匈牙利の福者マルグリットはその一例です。マルグリットがその兩親ベラ四世陛下とラスカリス皇后がお立てになつてゐた誓願に從つて、ドミニコ會修女達の修道院へ捧げられた時は、未だ四歳になつてゐませんでした。そしてマルグリットが頻りにお願ひした結果やうやく、修女の白い修道服を頂くお恵みを得た

のは七歳の時で、説教者教團（ドミニコ會の事）の總長フンベルト・ド・ローマンスの手に莊嚴誓願を立てたのは十二歳の時でした。

イメルダが、或日お父樣とお母樣に伴はれて、ヴアルデイピエトラの修道院で謙遜にお願ひしたのも、やはり聖ドミニコの娘達の白い修道服でした。

何故ドミニコ會の、そして何故ヴアルデイピエトラの修道院だつたのでせう？ ボロニアは、熱心な澤山の修道院に不足してゐませんでした。夫々異つた修道會に屬してゐる色々の修道院がありました。ドミニコ會の修道院だけでも六つあつて、その中には聖アグネス修道院もありました。それでヴアルデイピエトラが、同じ會律の下にある外の修道院を措いて選ばれたのは、若しその澤山の修道女の所爲でないとすれば、その熱心と嚴格の所爲でせう。それに多分、イメルダの二人のドミニコ會の伯父樣達の影響もあつたに違ひありません。この二人の伯父樣、ギヨム・ランベルチニ神父樣とヂル・ガルヂ神父樣は、ごちらも近くの聖ドミニコ修道院に住んでゐました。

而し若しこの二人の伯父樣達がその姪をヴアルデイピエトラに導いたとしても、それは唯神樣の御攝理の道具になつたに過ぎません。その御聖體に對する愛を輝かしく發表する樣にとイエズス樣から望まれてゐるイメルダは、ドミニコの園に、聖麵麭の裡に在しますイエズス樣への信心を芽ぐませ咲かせるにふさはしい土地を見出したに違ひありません。説教者教團は、その祭壇の御聖體に對する信心で聞こえてゐました。その頃もう、御聖體に對する信心は、この會の特徴の中に數へられてゐたのでした。

イメルダは十歳でヴアルデイピエトラの修道院に這入りました。と云つても唯の寄宿生として這入つたのではありません。その時代は、既に家庭で始められた教育を、修道女の愛情深い指導の下に完成する爲めに、子供達を修道院の内部に受入れる一種の習慣がありました。でもイメルダの場合はさうではありませんでした。イメルダは生徒としてヴアルデイピエトラに受入れられたのではありませんでした。生徒として這入つた子供達は修道服を着ませんでした。然しイメルダは一室の見習期の後、白い修道服を着せられました。修道院の中に住んでゐる若い寄宿生達は、修道女とは呼ばれませんでした。而るにイメルダは、傳へにも書き物にも修道女として表はされてゐます。かく歴史は、エガノ・ランベルチニとカストラの小さい娘を本當のドミニコ會修道女として示してゐます。

イメルダは誓願を立てましたでせうか？ これに就ては何も確かな文書がありませんので、私

共は、イメルダが修道誓願を立てる前に、イエズス様はその樂園にお引取りになつたものと考へ度くなります。イメルダはドミニコ會の會律を、幼いその年齢に相應しく守りました。その會則の守り方であらうと、基督教信者として、又修道女としての德の實踐であらうと、誰も自分以上に熱心な修道女のあるのを許しませんでした。何事に就ても、自分が一番熱心でなければ承知出來ませんでした。年代記々者は、この十歳の子供が、修道女一同の非常な信心を啓發する程に、ドミニコ會の修練女としての義務を果す事に務めた事を、逃さず記してゐます。イメルダはその仲間の人々の活きたお手本でした。イメルダは謙遜で慎み深く、從順で優しく愛敬があり、それに献身的でしたから、知らず〳〵人々に凡ての德のお手本を與へてゐました。

イメルダが修道院の閾を跨ぐか跨がぬかにその子供らしい德は進歩し、日に日に明らかに、深く、強くなつて參りました。イメルダの最も甘美な最も樂しい喜びは、美しい字で飾られた大きな歌隊の本の頁を飜し、修道女達と一諸に歌つて、神樣を讃美する事でした。イメルダは他のお仕事のない自由時間を、聖櫃の下で一人過すのが好きでした。それは、イメルダの靈魂が、その喜びを誰にも見られず思ふまゝに洩らす幸福な時間でした。それは、何ものからも妨げられない平和な時間でした。それは、初聖體の日を待ちあこがれる心待ちの時間でした。そしてそれは又、あまり何時

幼きイエズス樣は或る日神殿に伴はれました……イメルダの兩親はイメルダを祈りの家なる修道院に歡んで伴ひました…子供のお召を勵ますのは兩親の務めであります

修道院の中ではいつも祈りに勤しんで居ります　修道女等は彼女等を深くお愛し下さる天主様に愛を献げながら歡び歌ひ御父の光榮を讃へて居ります

迄もお出でにならないイエズス様に、その遲い事をかこつ苦しい悶への時間でもありました。

第四章　天國で終つた初聖體

イメルダはかこちました。でも、その歎きに苦味はありませんでした。イメルダの望みの烈しさは、その心を、その意志を、その靈魂を、その凡ての存在を、御聖體の裡に在しますイエズス様の方へ向けました。御聖體に對する飢は、イメルダをすつかり窶れさせました。神様こ一致したいこの渴きは、イメルダに絶え間ない嘆息こ切ない訴へを洩らさせました。

イメルダは、約束の救主の降臨を懇願する舊約の預言者の火の樣な言葉を、修道女達が歌ふのを聞き、又自分も皆こ一諸に歌ひました。聖櫃の前で唯一人、イメルダは預言者達の望みをそのまゝ自分のものこして、「天よ、我が魂に露こ降らせよ。義人を下して、我を訪はせよ。」こ心の中に繰返してゐました。

イメルダは、人からも聞き、又自分でも讀んだ默示錄中の切ない訴へをそのまゝ自分に當て嵌め、「主イエズスよ、來り給へ。」こ絶えず繰返しました。

聖マテオ福音書の中にあるお約束でもあり、又お誓ひでもある御主のお勸め、「求めよ、さらば

與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。叩けよ、さらば開かれん」を默想致しました。そしてその神聖なお約束を賴みに、イメルダはイエズス樣のその御言葉質を取つて、イエズス樣にお願ひするのでした。お乞ひするのでした。その聖心の戸をお叩きするのでした。イメルダはイエズス樣のお出でをお待ち申上げました。その特別の御惠みで、イメルダの爲め、嚴しい法規を和らげて下さるだらうと期待しながら。そしてそれはほんこうの所、法規でも何でもありませんでした。唯、習慣が、風潮が、イメルダを聖體拜領臺から拒んでゐたのでした。

イメルダは、望みの見えない所に、望みました。

一三三三年、爽やかな五月十二日の朝。

御昇天の大祝日の前日でした。信心深い靈魂には天國の御希望が輝きます。清められた靈魂には晴れやかな喜びと聖い望みが脈打ちます。イメルダの靈魂はかうした感じで滿ち溢れてゐます。

この時は又、ボロニアでも外の所でも、子供達が初聖體の準備をする時期です。イメルダは修道女ではあつても、幸福な初聖體拜領者の中には、今年は未だ加へられないでせう。近いとは云つても、イメルダは未だ規定の十二歳にはなつてゐませんから、熱心に望んでゐる聖體拜領を、今年もやはり未だ拒まれるでせう。それはイメルダの苦しみです。時間が大變長く思はれます。イメルダは悲しんではゐますが、でも希望を持つて心待ちにしてゐます。若し神父樣方が頑固でいらしても、少くともイエズス樣はお動かされにならないでせうか。イエズス樣は全能でいらつしやいます。それで溢れる信仰と希望を以つて、イメルダはその好きな言葉「主よ、來り給へ。おゝ、我がイエズスよ、來り給へ」と繰返してゐます。

ヴアルデイピエトラの歌隊で、修道女達は豐熟祈願日の諸聖人の連禱に答へました。修道院附の神父樣は御昇天大祝日前日の御ミサをお歌ひになりました。神父樣が祭器室にお引取りになつて祭服を脱いでいらつしやる間、修道女達は聖務の六時課と九時課を誦へました。それからみんな毎日のお仕事の爲めに、修道院内のそれぞれの持場に、散らばつて行きました。

イメルダは――これはこの子供の特權で――自分の席に居殘つて、イエズス樣と親しいお話しを續けてゐます。

この時、イメルダは何を申上げたでせう？存じません。誰にも分りませんね。でもその望みの烈しさと、その言葉の力强さは察する事が出來ます。明日の大祝日、それに近付いた子供達の初聖體、唯イメルダの愛を一層焚附け、天翔けるその心の高まりを益々早くし、そしてそのお祈りを

もつと〳〵切にさせるだけです。イメルダの想ひはイエズス様の上にぢつと注がれてゐます。その感情はイエズス様の上に凝り固つてゐます。その靈魂はイエズス様に奪はれてゐます。その唇は、

「イエズスよ、來り給へ。來り給へ、お、、イエズスよ。」と同じ言葉を繰返してゐます。

その時何が起つたでせう？何故、突然イメルダは、口に云ふ事の出來ない喜びが擴つて來たのを感じたのでせう？どんな幸福な感じが、思ひかけなくイメルダを戰慄かせたのでせう？

イメルダは目を擧げました。あッ！　御覽なさい。その眞上に、恰も空中に懸かつたかの樣に、宙に浮んで……眞白い一枚の小さな聖麵麭が……。

イメルダは悟りました。その祈りへの、その願ひへの、イエズス樣のお答へです。イメルダの期待にお添ひ下さるイエズス樣です。その小さい婢女の信賴を欺かない爲めに、聖櫃の扉を毀さないで出ていらしたイエズス樣です。イメルダの愛に打負かされ、澤山の他の奇蹟の上に、新たに一つの奇蹟をお行ひになつてイメルダの許にお出でになるイエズス樣です。

身動ぎもしません。感動の爲めに口もきけません。胸は高鳴り、眼は聖麵麭の上にぢつと坐はつたまゝ、兩の腕を伸べてイメルダは待つてゐます。イエズス樣が、その最後のもう一歩をイメルダの方へお運びになるのを、待つてゐます。小さな白い聖麵麭は、未だイメルダの上高く宙に浮いてゐます。

その時、修道女達は、この子供のお祈りがいつもより長引くのを訝りました。中には、その手傳ひを待つてゐる人もありましたが、イメルダは中々やつて參りません。樣子を見に歌隊にやつて來た修道女の一人は、戸を少し明け、イメルダに向つて氣忙しく合圖をしてから、はつと、脫魂狀態になつてゐる天使の樣な子供と、その前にぢつと動かず止つてゐる光り輝く聖麵麭に氣が付きました。

驚き且つ感動して、この不思議な發見を知らせる爲めに、修道女達の許へ、修道院附のお年寄りの神父樣の許へ、急ぎました。修道女達は信ずる事が出來ません。エプロンを除け、各目のお仕事を放つて、直ぐにお聖堂さして參りました。そして今度は自分達が、見そなへ手に支へられてゐる聖麵麭の聖前に、喜びと感嘆の叫びを辛くも押へて、平伏し禮拜する番になりました。

この知らせをお受けになつた神父樣も、又直ぐいらつしやいました。そして明らかにお悟りになりました。それは妄想でもなければ想像が產み出したものでもありません。神父樣自身夢を見ていらつしやる譯でもありません。事實が目の前にあるのですもの。誰も證據を否む事は出來ません。

神父樣は大急ぎで、白短衣と肩掛をつけ、聖皿を手にお跪きになりました。かうして神父樣が

お捧げになつた聖皿の上に、聖麵麭は靜かに降つて來て、落付きました。神父樣は、そこに居合せた人達が拜する樣に、祭式に從つて、天から降つたこの御聖體の一片を捧げていらつしやいます。「見よ、神の羔を、見よ、世の罪を除き給ふ御者を。主よ、我れは不肖にして……」御主をお受けするにふさはしい！ おつ！ い、え、イメルダは自分がふさしくはない者である事をよく知つてゐます。一體何處に、神樣をお受けするだけの、神樣の御血肉で養つて頂くだけの、價値ある者がゐませう？ イエズス樣をお受けするにふさはしい！ い、え、百度でも千度でも、い、えと申しませう。イメルダは、取るにも足らぬ自分の爲めに、イエズス樣が、そんな驚く程の不思議を行つて下さるにはふさはしくない事を知つてゐます。然し同時にイメルダは又、その賤しい婢し女に對するイエズス樣の愛を知つてゐます。感じます。イメルダは自分の生命の凡てであるイエズス樣、自分の凡ての望みを果す爲めにいらつしやるイエズス樣を、お愛し申上げてゐる事を知つてゐます。感じます。

そしてイメルダの戰慄く唇に神父樣は、その奇蹟の聖なる麵麭をお置きになりました。「我等の主イエズス・キリストの御體、汝を永遠の生命へ保たん事を。アーメン。」

熱心に希望するならばイエズス樣は必ず來り給ひますイメルダは熱心に御聖體に在すイエズス樣を望みましたので御聖體は奇蹟の裡にイメルダにお降りになりました

地上にて天主様の住み給ふ天國は靈魂であります　天上では天主様が靈魂の爲に永遠に終りない天國となります

永遠の生命へ！　お、！　これがほんこうに、ぴつたりこほんこうにうまく云はれたこは、お年寄りの修道院附神父様は御存じありませんでした。

心を内に集め、目を閉ぢ、手を胸の上に組合せて、イメルダは幸福に浸り切つてゐます。その心のお愛し申上げてゐる御者を、こう〳〵見出したのです。長い〳〵間熱望してゐた幸福な時です。何物もイメルダの邪魔をしません様に。修道女達よ、靜かに！　あなた方の小さい子供に、あんなに長らく待ち焦がれてやつこ頂く事の出來たそのイエズス様を、心靜かに樂しませませう……。

修道女達は、イメルダがその思ひを、お愛しする御者に洩らさなければならない事を知つてゐます。一人々々、足音を立てない様に注意して引取りました。そしてこの小さい修道女自身の口から、この出來事の詳しい話しを聞かうこ、一同は氣をもんで待つてゐます。神様の思召で行はれたこの初聖體拜領後のイメルダを見ようこ、イメルダの喜びに與らうこ、イエズス様こイメルダの間の親しい交りに就いて、何かを知り、その香氣を吸はうこ、首を長くして待つてゐます。

待ち兼ねてゐる一同には、一分一分の經つのが、それは〳〵長く思はれます。でも誰に、その樂しい會話を一秒でも縮めに行く勇氣がありませう？　誰に御主のものを自分の方に求める勇氣がありませう？　誰に、その小さい特權者を、イエズス様こ爭ふ勇氣がありませう？　誰に、イエズス

様の御胸から、抱かれてゐるイメルダを掴取る勇氣がありませう？　一同は待つてゐます。が時刻は段々移ります。行つて見なければなりません。でも未だ躊躇つてゐます。こう〳〵残念がり乍らも、イメルダを現實の世界に連れ戻す事に致しました。

子供は未だ自分の場所に、前と同じ姿勢で、心を内に潜めて跪いてゐます。半ば開かれた唇には、この世のものとは思はれない微笑が凛つてゐます。而し唯何となくその微笑は凝り固つて生きた感じがありません。

恐る〳〵一人の修道女がイメルダの肩に觸れました。が動きません。今度は思ひ切つてイメルダの腕を搖つて聲をかけました、「スール・イメルダ、いらつしやい。我が子よ、さあいらつしやいおそくなりましたよ。」何の答へもありません。唇には先刻からの微笑がそのまゝ漂つてはゐますが、少しも動きません。眼瞼は閉ぢ、イメルダの體は彫像の様に動きません。顔も手も、大理石の様に白く冷々としてゐます。子供は氣を失つたのでせうか？　修道女達が、イメルダを起たせ様として抱き上げたのは、もう既に生命のない體でした。

イメルダは、イエズス様をはつきりと永遠に、その目で見奉つて、聖體拜領後の感謝のお祈りを終る爲めに、天國へ行つてしまつたのです。今こそイメルダは眞實に、かう云ふ事が出來ます。

「私は私の魂の愛する御方を見出しました。しつかり捉へて、もう何處へもお行かせ致しません。」と。

天から下つた不思議なパンを、その神聖體に拜領し、その場から直ぐイエズス様が、御自身と一緒にその樂園にお連れになつた福者イメルダ・ランベルチニの眞實のお話しは、これで終りです。

ここにはドミニコ會の傳へが大切に保存して來たその憶えと、古い尊い十五世紀の年代記で讀んだ所を、そのまゝ誤らない様、何にも附け加へない様にして述べて參りました。子供達よ、イメルダの生涯は一つの敎へです。イメルダは、イエズス様の大きなお望みは、聖體拜領で皆さんの靈魂と一つにおなりになり度い事ですと敎へます。又皆さんが、どんなに熱心に、それにお答へしなければならないかと敎へます。イメルダは皆さんに、次の秘密をお傳へします。それはかうです。

イメルダは、イメルダをお愛しになつたイエズス様を、お愛ししました。イメルダは、イメルダに御自身を與へ度いとお望みになつたイエズス様を、お受けしたいと望みました。イメルダは、イエズス様に自分の愛をお示しするのに、唯毎日、空に覺えてゐるお祈りを申上げるだけでは滿足しませんでした。イメルダはそれを生々と感じました。強く望みました。その愛にふさはしく行ひました。イメルダは、イエズス様の思召は何事によらず皆んな果たしました。イタルダは、聖體拜領

臺でイエズス様をお受けしたいといふその望みをイエズス様にお示しするのに、唯毎日さう申上げるだけでは足りないと思ひました。イメルダは、イエズス様の御目に障るかも知れない様な缺點は、みんな注意して避け、良心に從つて、その年頃と境遇にふさはしい凡ての德の實踐に、自分を慣らしました。

子供達よ、小さいイメルダがした様に、皆さんを愛し、皆さんをその聖宴にお招きになつてゐるイエズス様にいらつしやい。皆さんの靈魂に、イエズス様にふさはしいお住居を用意なさい。何でもみんなさつぱりと清らかに、單純に正しく、眞劍に忠實にね、ようございますか。それから、イエズス様のお望み通りになさい。イエズス様のお召しにお答へなさい。お聞きなさい、イエズス様は聖櫃の奥から皆さん一人々々に仰有います。

「我が子よ、小さい人達のお友達、幼く汚れない靈魂達のお友達、あなたのイエズスは私です。私が力を與へるパン、生命のパンです。

「我が子よ、私にあなたの靈魂をお開きなさい。私はそこに降り、そこを何時迄も自分のものにしたい。私はそこに住みたい。私はそこに堅い望みと寛大な決心を成長させたい。私は丁度お庭にする様に、あなたの靈魂の中に、謙遜の董と、純潔の白百合と、清らかな愛の薔薇を植ゑて美しく咲

かせたい。

「我が子よ、忘れない様になさい。あなたは日に日に、年々に、成長します。青年時代へ足を踏み入れるか入れないかに、あなたの德は澤山の試みに會ひます。正しい道を逸れないで人生を辿る爲めに、あなたは間もなく私の聖い力が必要になります。あなたの神様である私が、私自身をあなたに與へたあの輝かしい朝を、何時も忘れないでいらつしやい。初聖體の日にした様に、私の聖體拜領臺にいらつしやい。さうすれば私は、危險の中に、あなたを永遠の生命に保つ生命のパンで養つてあげます。

「我が子よ、忘れない様に、よく覺えていらつしやい。よございますか。」

聖體の天使羅者イメルダ

昭和十年十二月廿四日印刷
昭和十年十二月廿五日發行

定價金十五錢

譯者　福島市
コングレガシヨンド
ノートヌルダム修道院

發行者　仙臺市元寺小路一六一
ヴエンサン・ブリオツト

印刷所　仙臺市國分町八八
笹氣印刷所
笹氣幸助

發行所　仙臺市元寺小路一六一
カトリツク函館教區出版部
振替仙臺一〇〇三七番

終